

下田歌子文書(四)

— 翻刻 —

『下田歌子宛書簡—河原操子書簡』(二通)

— 明治三十七年六月十日付書簡及び明治三十八年五月二十二日付書簡 —

和田 大知

〔本資料の位置づけ〕

今回翻刻を行った書簡①『下田歌子宛書簡—河原操子書簡』(明治三十七年六月十日)、『及び書簡②』『下田歌子宛書簡—河原操子書簡』(明治三十八年五月二十二日)、『²は、特殊コレクション「下田歌子関係資料」として実践女子大学・実践女子短期大学図書館(日野キャンパス)が所蔵している資料群の一部をなすものである。

書簡の差出人である河原操子(一八七五—一九四五)は一九〇三年末から一九〇五年末にかけて、内蒙古ジョソト盟ハラチン右旗のグンサンノルブ郡王府に滞在し、毓正女学堂を設立して同地の婦女に対する近代教育に携わったことや、後に同地から三名の女子留学生を伴って日本に帰国したことで広く知られる人物である。この間の河原の活動については、従来大別して四つの観点から言説がなされてきた。まず戦前戦中期を通して、河原の日露戦

争時の内モンゴルでの軍事、諜報上の貢献は顕彰され続けてきた。特に教育者として内モンゴルに派遣され、現地で受容されたという事実は、「満洲国」建国への道程を語る「神話」の一部に組み込まれてきた。一方で近年では、内モンゴル史の立場から、当時の内モンゴル王公による教育施策を、その近代化政策の一環として分析する研究が進んでおり、内モンゴル近現代史の中にも河原等の女性教習が位置づけられつつある。また教育史という立場からは、日本、中国における女子教育史、思想史中に河原が果たした役割が検証されつつある。⁵さらに十九世紀末から二十世紀初頭における日清間での教習及び留学生の派遣、受け入れに着目した研究が進む中、内モンゴルにおける事例の独自性が注目され、河原等の活動の背景や目的、その推移の詳細が、上述の「神話」からは切り離されて分析されはじめたのである。こうした研究の蓄積により、河原操子をはじめとする下田歌子(一八五四—

一九三六）の門下生が、女子教育の普及や発展、日本及びアジアにおける女子教育自体の地位向上に情熱を持っていたこと、その後には国内の有力政治家や軍部による大陸政策の一環としての支援があったこと、そして、こうした二つの原動力が大陸における女性の教育活動を展開させていたのだという、統合的な歴史像が提示されつつある。

一方で今回翻刻した書簡には、上述の先行研究及び、先行研究から導かれる歴史像の中には含まれていなかった、同時代における「女性・婦人間ネットワークの海外展開の様相とその意義」とでも名付けるべき新たなテーマが提示されているように思われる。

例えば書簡①からは、ハラチン王グンサンノルブ（一八七二—一九三一）の妃が河原を通じて、下田が顧問を務める東洋婦人会に参加しようとしていたことがわかる。草創期の東洋婦人会については、その創設の目的や付随する政治上の要請、創設に携わった日中女性の思惑、動向が研究されており、特に日本側にはその後のアジアにおける指導的地位の確保を志向する政治的な力学が存在したことが明らかになっている。しかし日本で結成された東洋婦人会が、国外の婦人等と具体的にどのような連絡関係を構築し、またこうした関係がどのような影響を政治、外交の面に及ぼしたのかについてはほとんど明らかになっていない。河原が懇意にしていたハラチン王妃は清朝皇族の肅親王善耆（一八六六—一九二二）の妹であり、また書簡②中にあらわれる木村芳子（一八七四—一九一〇）は、河原と同様下田の門下生で、北京の肅親王

の下に派遣された家庭教師である。グンサンノルブと肅親王が後の日本の大陸工作に大きく関わってくることは周知の事実であるが、こうしたネットワークの基底にある有機的な人的結合の一つに、王妃、婦人間関係を見出すことができるのではないだろうか。

また書簡②からは、「女性・婦人間ネットワーク」が上記のような茫漠とした「人的結合」の一要素に留まらない、より直接的な政治展開の主体となっていた様子がうかがえる。ハラチン王府からの帰路、北京で肅親王府を訪問していた河原が、肅親王妃を説得する形で女子教育に関して西太后を動かそうとしているのである。この計画には内田夫人、つまり当時の在北京特命全権公使、内田康哉の夫人である内田政子も密接に関わっていたようである。政子自身、当時服部宇之吉・繁子夫妻が北京に設立した豫教女学堂と淑範女学堂で教員として活動しており、女子教育に関する当事者でもあった。北京で展開していた「女性教習—肅親王妃—日本公使夫人」による西太后に対する働きかけの内容こそ不明であるものの、当時清朝における政治の実権を握っていた西太后にまで到達し得る、正規の外交ルートとは別個の窓口が構築されつつあったという事実は軽んずるべきではないであろう。一九〇二年、京師大学堂師範館が設立されるにあたって教習として招聘され、妻繁子と共に北京に赴任していた服部宇之吉は後に、「女子教育を興すの道は、西太后の口から、女子教育の必要を仰せらるるにある。それには皇太后の心を動かす人がなければならぬ。而

してその人は女子であつて、上流社会の女子教育に、経験を有する人でなければならぬ。下田先生を措いては、適当な人がない。下田先生ならば、この場合唯一の適任者であると考へた。何とかして、下田先生を西太后に推薦し、二人の女英雄握手の機会を作り度いものと、ひそかに考へてその実現の機を窺つていたのである。機会が来たとしても、適当な通訳者がないと話が十分にできない。男子の通訳者では、西太后と下田先生との間に立つて、奥の奥まで話を進めることはむづかしい。どうしても、女子の通訳者を必要とすると考へた。その意味もあつて妻の繁子をして、支那語の学習に力を用ひさせたのである。」と振り返っている¹⁰。西太后と下田の面会は最後まで実現しなかつたものの、日本と清朝の婦人間の連絡関係は、一定程度の有効性が期待されるなかで構築されていったのであろう。東洋婦人会を始め、この時期に構築され、機能し始めた国内外の女性・婦人間のネットワークとその動向に注目することで、これまで表に現れてこなかつた新たな歴史像が結ばれるのではないだろうか。

書簡①中での「浅岡先生の御息」、つまり日露戦争初期に特別任務班の一員として戦死した脇光三¹¹についての言及や、書簡②中の河原の縁談に関する記述など、この二件の書簡を含む情報には興味深い点が多くあるが、そうした分析は次号以降にゆずり、ここでは本書簡資料が有する魅力について、自身の浅薄な愚見を述べたところで結びとしたい。

〔翻刻〕

・本文は底本原稿用紙記載の字句を出来る限り再現するように努めたが、一部の異体字、変体仮名などは現在通用しているものに改めた。また改行による段落分けや文頭の一字下げについては、底本中の記載に則してこれを反映した。一部判読できなかった部分については□を用いてその字を補った。

・実際の書簡そのものについてはその所在が判明しておらず、一九四三年に出版された下田歌子の伝記、『下田歌子先生傳』¹²の編纂過程で作成されたという書簡の「写し」が現存している。¹³両書簡共に四百字詰め原稿用紙を用いてその内容が書き写されており、今回の翻刻はこの「写し」を改めて活字化するという試みとなる。また書簡が記された年代については書簡自体には記載がなく、「写し」の作成者が推定を行つたと思われる。原稿用紙が収められた封筒や原稿用紙の欄外に「明治三十七年」もしくは「明治三十八年」と記した上で、それを後に書き改めた形跡が残っている。本翻刻では執筆者の文責により改めて年代を比定した。

1 実践女子大学図書館編（一九八〇）『下田歌子関係資料総目録』

- 2 実践女子大学図書館編（一九八〇）『下田歌子関係資料総目録』No.0733
- 3 その代表的なものに黒龍会編（一九三三）『東亜先覚志士記傳』や東亜同文会（一九三六）『對支回顧録』が挙げられる。
- 4 グンサンノルプの近代学堂創設および教育思想については于逢春（二〇〇一）「清末内蒙古の教育改革と貢王について―いわゆる「貢王三学」を中心として―」『アジア教育史研究』51:63、ナヒヤ（二〇〇六）「内モンゴルにおける近代教育―その思想と実践―」『アジア地域文化研究』3:51-63、同（二〇一〇）「清末における「教育興蒙」について―内モンゴル東部を中心に―」『アジア地域文化研究』7:61-81、等
- 5 韓韓（二〇一四）博士学位論文「中国近代女子教育における日本受容」名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本文学文化専攻・や孫長亮（二〇一九）「清末中国における日本女子教育受容の研究」岡山大学大学院社会文化科学研究科・等、日中女子教育史中の人材、教材に関する交流の様相が体系的に明らかになりつつある。
- 6 横田素子（二〇〇三）「喀喇沁右旗札薩克貢桑諾爾布的学堂創設」『アジア民族造形学会誌』3:327-335、同（二〇〇五）「内蒙古喀喇沁右旗学堂生徒の日本留学」『アジア民族造形学会誌』5:91-108、同（二〇〇六）「土爾扈特王帕勒塔の渡日に関する一件」『中日文化研究所所報』5:45-67、同（二〇〇九）「一九〇六年におけるモンゴル人学生の日本留学」『東西南北』和光大学総合文化研究所年報「二〇〇九年号」153-172、赤坂恒明（二〇一九）「旧トルゴード東路右旗郡王パルタの明治天皇への謁見記録」『史滴』41:3-24、特に清朝末期における内モンゴルやチベットの「留学生」という存在について、その政治的な特異性を強調したのが石濱裕美子（二〇二二）「明治期チベット・モンゴル出身「留学生」の特異性について」『九州大学東洋史論集』49:1-30、
- 7 薛梅（二〇二二）「二十世紀初頭における日中女性提携の系譜」『東洋婦人会の誕生に至るまで』『中国女性史研究』31:52-70、董秋艷

- 8 (二〇一〇)「草創期東洋婦人会に関する研究」『教育基礎学研究』7:71-84、等
 - 9 河原と木村の関係については前掲石濱（二〇二二）を参照
 - 10 加藤恭子（二〇一五）「二十世紀初頭における日本人女子教員の中国派遣」『ジェンダー研究』お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報』18:73-85、
 - 11 故下田校長先生伝記編纂所編（一九四三）『下田歌子先生傳』:415-416、
 - 12 長野県師範学校校長を務めた浅岡一の三男。脇光三は日露戦争中に特別任務班に所属し、東清鉄道の爆破に赴くにあたってハラチン王府を経由した。河原は東京女子高等師範学校に通う以前、長野県師範学校女子部に通っていた際に浅岡に師事していたため、脇光三とも面識があった。ハラチンで河原に偶然再会した後、脇はチチハル方面へ向かったが一九〇四年四月に戦死したとされている。
 - 13 故下田校長先生伝記編纂所編（一九四三）『下田歌子先生傳』
- 「面書簡の原稿用紙一枚目の右上には、共に「」の記号が赤えんぴつにより付されている。前掲『下田歌子先生傳』第十一章「支那留學生の教育」執筆のために用いられたと見ることができよう。

書簡①『下田歌子宛書簡―河原操子書簡（明治37年6月10日）』

内蒙古喀喇沁王府内

河原操子

書留にて御送りいたゞき候二通の御手紙まことに御うれしう繰り
かへし拝見致し申候実は過日来あまりの御多忙の貴体に御さはり
遊ばされしやうの御事は御座まさずやといたく御案じ申上居り候
ひし折柄格別のおさはりも御座まさぬ由承り何より御うれしう
存上候 何卒呉々も御大切に遊はし給はるやう伏して願上奉り候
扱福晋の東洋婦人会入会につき早速御手数遊はし頂きまことに有
難く存上候福晋も大層およろこび遊ばされ呉々も御よろしく申上
られよと申出られ候 会費は近々御尊宅あてにて御願申上ぐべく
候間御よろしく願上まゐり候 少し出過ぎたる申分にて恐縮の至

りに存居候へども実に軍国多事の今日実力の足らざる方々を御率
る遊ばされての御仕事御骨の御折れ遊はされ候とは重々御察し
申上居候戦争後の吾々国民の覚悟はまことに御申聞けいたゞき候
御言葉の通り數ならぬ私も千載一遇の此の有難き御代に生れ出で
誠に此上なき幸及ばずながら将来出来得る限り働き見度と存じ現
今寸陰を惜しみて実力を養ひ居候次第に御座候 露国は戦争に
は負け候へ其他の側にてなか／＼づるく立ち廻り居申候私事も此
地に於て出来得る丈の御すけを致し居る次第学校事業外にいさゝ
かにても御役に立ち居候ほど何卒御悦び頂き度願ひ上候 福晋へ
の下され物につき御話し申上候ひし処非常におよろこびなされ大
楽しみに遊はし居られ候 王爺より華族女学校の生徒の方に書を
願ひまた先生に御染筆を願うて当王府の宝として代々傳へ度と存
候へども願ふこと叶ふや否やと申され候まゝ早速手紙にて御伺ひ
申すよし御答へ致しおき候へども如何に御座候か決して／＼いそ
ぎ候ものには御座なく万一御聞届け給はらば此上なき幸に御座候
また私より王にこは私よりの御願ひに候へども我師のため王に一
つ筆を御振ひ頂き度と申候ひしに王より慶びて筆とり申さん併し

如何なるものが御望みか伺ひ呉れよと仰せられ候次第次便にて

御洩し頂き度願上候 只今北方へ人を出しおき候まゝ、近き中に北

進の人々の様子か知れ候ことゝ、存候知れ次第に申上べくまた知れ

ざる今日にても浅岡先生の御子息はたしかに存命のことゝ、存居候

まことに恐入り候へ共右御序の折浅岡先生に御傳へ頂き度御願申

上候

呉々も御大切に遊ばし給はるやう祈り上候

かしこ

六月十日

河原操子

下田先生

人々御中

【資料2】出納番号 733

書簡②『下田歌子宛書簡―河原操子書簡（明治38年5月22日）』

五月二十二日

カラチン 河原操子

一筆聞え上げまゐり候さて過日は御懇なる御手紙いただきまことに
ありがたく繰りかへし拝見致し候 早速御礼伏申上べき筈に御
座候ひしも出発前にて何かと取りまぎれ居り心にまかせ申さずま
た当地着後も日々学校のこと王王妃の御仕事の御すけなどにて少
しのいとまも御座なく日々思ひながら今日迄延引致し候つみ何卒
御ゆるしいたゞき度候 御手紙により候へば先生には何のおさは
りもおはしまさず御出で遊はされ候よし誠に何より御うれしう存
上候 木村さまも御着の後水土の御さはりもなう至つて御元氣に
て私も何より結構とうれしう存上居候

肅親王府にても非常の御悦びにて当王妃もまことに御満足の御様
子に候 才覚を兼ね備へられ経験も御充分の御こと故必ず見事の
結果を奏せらるゝことと存居候 肅親王と当王妃との御間柄はま
ことに特別に居らせられ王妃の御一言は他の十言よりもきゝめの

御座候ほどに候間過日王妃を経て親王並に同王妃に「木村さんは
確實なる人物故総てについて御安心下さるやう尚又当人自身の考
に及ばざる事は下田先生に御相談致して御助け申上げませうから
何卒何なりと御腹臆なう御申聞け下さるやう」と申上候ひし処御
両方様とも大層御悦び遊ばされ「木村さんの御立派なる方なるこ
とは私共は下田先生の御門弟なる点を以て十分に信じて居りま
す、なほ同先生が我国につき一方ならず御心配下され候ほどは実
に何とも御礼の申上やうも御座いません、かく種々申上げたらは
さぞあゝ例の支那人が何をそら世辞を云ふかと思ふて下さいませ
うが決して左様な次第にはこれなき故どうぞ御序の節下田先生に
呉々も御よろしく御礼を申上くれよ」とのことに御座候ひき。

肅親王は平和克復の後には東三省の方に趣はれ候やも計られずと
の事に御座候併しこは只今は秘密に相成居申候今一つ内田公使夫
人の御帰蒙を待ちて 西太后をうごかす一事が公使と当王妃との
間に御相談かなり立ち居り申候

王妃にこれ丈の決心をおさせ申すためには私も屢々口をす□致し
て説きつけ申上候 無論女子教育のことにてこれが思ふ通りに運

び候はゞ将来日本の爲にも余程面白かるべく又御迷惑様乍ら 先
生にも是非一度は御来臨を仰がねばならぬこと、存居候 何卒し
てこれを成り立たせ佐々様などにも御盡力願ふ様致し度と手紙を
以て佐々さんの事公使夫人に願ひ置きたる次第に御座候（あゝ
先生実に日本人はまだ気が小う御座いますこと居留地のうるさい
ことゝ申したらたとへ様も御座いません。まるでお互にあらゝの云
ひやいばかりして居るのですもの誠にくだらぬ話で御座います。
私は上海、天津、北京等で総領事や公使の御夫人方より様々歎
息話も承り又自身にも親しく見ても居りますので此頃は一向驚
きも致しませんが木村さんも佐々さんも大分感じて居られる様
で御座いました）さて私事将来につき一方ならず御心配いたゞき
いろ／＼御懇なる御言葉いたゞき誠に有難う御礼は単紙に盡しか
たく候

只今の処誰とてあても御座なく候尤も本年上京中に川島様服部様
なども御心配下されて四五人より申込まれ候ひしも川島御夫婦の
御方と御相談の上にて皆一時御断り致したる次第に御座候過日の
御手紙にも御申聞け頂きたる西欧に遊び候件私は実に望みに堪へ

申さず候かつは私事誠に実力もたり申さず世事にも通ぜず候まゝ

当地は此一年間に予定の処まで相済ませおき（帰蒙後誠に工合よ

ろしく此分にては予定通りに参りさうに御座候）大抵に此方をき

り上げ其後は出来得べくは外交官の妻になつて是非一度西洋人間

に入り世界的の知識を得て世界的に働き度もありと存居申候 併

し外交官に限りたる次第には御座なく何卒然るべき縁も御座候

はゞ御心配いたゞき度伏して願上奉り候 内田公使並に福島少将

も非常に御心配下され候へども公使は御夫人の御不在のこと故今

年は何も御話承はり申さず候ひき 公使への御傳言は其節たしか

に申上候ひし処公使よりも呉々も御よろしく申上られよと申出ら

れ候当王府御兩位より呉々も御よろしくと申出られ候過日御一緒

に御撮りなされし御寫眞を先生に御送り申上て先生のを頂戴致し

呉よと御依頼をうけ候ひしも出発前にて取り込み居候ひしまま木

村さんに大阪旭新聞記者の牧氏帰朝の折たのみ下さるやうにと願

ひ置き候ひしまゝはや御受取下されしことならんと存候 申上度

ことは盡せず候へとも何もく後便にゆづり申候呉々御大切に御

願ひ申上まゐり候まことに恐入候へども皆様によろしく御願ひ申

上候

かしこ

五月二十二日

河原操子

下田先生

御許人御中

露西亜では手をかへ品をかへて蒙古の各王をいぢめ居候へど其

方法は実に巧みなるものに御座候、当カラチンへも絶えず方法

をめぐらし居申候 請不用恐怕とは毎々王に申上居る言葉に御

座候

王妃より呉々もよろしく申上るやう申出られ候

くどくしくかきつらねまことに失礼に御座候へども何卒何時

にても御ひまの折に御一覽たまはり度伏して願上奉り候

〔謝辞〕

本翻刻を作成するにあたっては、実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所の久保貴子氏のご協力を多分に賜った。深く御礼申し上げる。また本翻刻の発表は笹川科学研究助成の成果物である。

わだ・だいち／早稲田大学 教育学研究科 博士後期課程